

水産ジャーナリストの会
会報 No.106

Japan Fisheries Journalists' Association

2010年2月4日
水産ジャーナリストの会
(会長・梅崎義人)

事務局：
〒187-0002 東京都小平市花小金井
5-36-34-212号
TEL&FAX 042-464-7155

第26回(平成22年度)定期総会開催 09年年度賞は「海と森づくり推進協会」と「旬材」

ホームページ開設などを報告

2010年度の第26回定期総会が1月22日、大日本水産会・大会議室で開催された。冒頭に梅崎義人会長があいさつ、本年度は研究会の充実と会員確保に力を入れることを強調し、会長としての任期が本年いっぱいで切れるので、来年の総会で新しい会長を選出してほしい、と述べた。

次に小島敏男事務局長から2009年度の事業について説明があり、5月からホームページを開設した点などの報告があった。2009年度の事業報告と決算報告、2010年度の事業計画と予算案などが了承された。

〈09年年度賞の贈呈式〉

総会に続き09年度水産ジャーナリストの会年度賞の贈呈式に移り、次の2者に表彰状が授与された。

◇NPO法人 海の森づくり推進協会

平成14年創立以来、海藻による海の森づくりを推進するためコンブ種系100メートル運動を提唱、出荷後の空の養殖生簀を利用したコンブ海中林の造成を推進してきた。磯焼け防止、沿岸域の水質浄化による水産資源の増殖に貢献した。

◇株式会社 旬材

平成14年度設立、通常の流通ルートに乗らない「すそのもの」水産物を都市の業販事業者に販売する新しいITによる流通システムを開発し、地方の漁業者の窮状打開に貢献した。

〈年度賞 受賞のあいさつ〉

●海の森づくり推進協会

代表理事 **松田 恵明氏**

水産人は水産に自信を

このたびは、貴重な水産ジャーナリストの会の年度賞にお選びいただきありがとうございました。2001年1月、大水の佐野会長の時代に業際懇談会で水産資源倍増論のお話をさせていただいてから10年目にこの会場でこの賞をいただいたことはご縁を感じ、心から感謝申し上げます。

水産は誤解されています。持てる可能性が評価されていません。漁村にいる人自身がもっと水産業を評価すべきです。一昨年、世界水産学会があり、英国のクロフォード氏は「脳の正常な発展に必要なもの」として不飽和脂肪酸、ヨード、DHAを挙げられました。この3つを持つものはなにか、



第16回 年度賞賞状を手にする2団体代表
左から西川益通 株式会社 旬材 社長
松田恵明 (NPO)海の森づくり推進協会代表理事

それは海藻です。水産人はもっと水産に自信を持つべきです。我々は壱岐東部漁協でモデル事業をつくりました。ここでは海女さんのグループが長崎水産大賞を受賞しました。こうした成功事例をあちらこちらでつくっていきたい。

●株式会社 旬材

社長 西川 益通氏

日本の魚を海外に

立派な表彰をいただきありがとうございます。旬材を平成14年に立ち上げた理由は、日本の漁業があまりに疲弊していたことです。私はもともとヤンマーディーゼルで漁船づくりを担ってきました。知り合いの漁師がどんどん減っていくことから、彼らが困っているのは流通形態が変わったこと、そして魚が売れないと気づき、お手伝いをしたい、と思ったのがそもそもでした。現在、全国55の漁村と消費地に78の外食をネットで結び「すそもの」といわれる売りにくい魚をいかに売ってゆくかを考えています。いろいろな人に協力してもらいたい、今年度中に100まで素材提供をしていきたいと思っています。

従来の事業に加えて、産業総合流通研究所の支援もいただいて、新しく「スコア」というシステムを構築中です。この仕組みを使えば、日本の魚を海外にも出してゆけます。ぜひともご指導、ご鞭撻のほど、よ

ろしくお願い申し上げます。

年度賞贈呈式のあと懇親会に移った。各氏のあいさつの要旨は次のとおり。

梅崎 義人会長

水産ジャーナリストの会年度賞を授与されたお二人に感動したのは、今の水産をなんとかしたい、という危機感から行動されていることだ。こういう人を捜して表彰するのがわれわれの役目だと思っている。

新型インフルエンザは元々、豚インフルエンザだった。豚が売れなくなってしまうので、米国がWHOに圧力をかけて名前を変えさせた、という経緯がある。地球上での畜肉生産は限度にきていて、動物たんぱくをどこから得るかといえば海の生物から、という時代がもう来ている。クジラの資源管理手法であるRMP(改定管理計画)を他の漁業でも適用する時代がまもなく来る、と私は考えている。

最後に、年度賞を授与すべき人はもっとたくさんいます。われわれだけでは情報が限られてしまうのでぜひとも情報をご提供してほしい。

●大日本水産会

白須 敏朗会長

将来の発展を秘めた水産業

2年ぶりに水産の世界に帰ってきました。漁政部長、水産庁長官を経て事務次官をさせていただき農水省を退官いたしました。昨年の9月から大日本水産会の会長を務めている。

私にとっては平成13年、水産基本法をつくるときが印象的だった。浜の声を国会に伝えよう、と日本中が水産で沸き立つころだった。有明の海苔の不作やクラゲ問題、WHO、燃油の高騰など、いまよりもっと世の中が水産に注目していた。

いま、改めて水産業について考えると、農業、林業とは違いがあると思う。制度的



主賓祝辞を述べる白須敏朗（社）大日本水産会会長

に予算が少ないけれども自由な価格形式ができる、自由な流通ができる。水産基本法は農業よりも少し遅れてできた。そして漁業には農業、林業はない先進性もある。資源管理を行えば持続的な営みを続けていくことである。水産業は将来の発展を多分に秘めているのではないか、と思う。

私はこれまでの人生において一期一会を大切に考えてきた。水産人の心意気はたいへん好ましいものであり、将来なんらかの形で一緒に仕事をしたいと思っていた。

人生いろいろあるわけで、運があり、不運がある。企業でもそう、水産業全体でもそうだ。けれども、私は思う、朝のやっこない夜はない、と。降り出した雨もいつかは止む。人生万事塞翁が馬、一陽来復、我々はもっと発展するという気概をもって取り組んでいかなくてはいけない、と日々思っている。

いま、100年に1度の大変革の時代を迎えており、私としても、こうした時代にあたり、初心を忘れずに原点に立ち返り、業界の発展のために何ができるかを考え取り組んでまいりたい。

●日本捕鯨協会

中島 圭一 会長

豪州のメディアの報道が変化

いま、日本は南氷洋で調査捕鯨を行っているが、今年はシー・シェパードが3隻の船で妨害活動を繰り広げている。旧来のス

ティーブン・アービン号に加え、今年はボブ・バーカー号という元タノルウェーの捕鯨船だった船を使い、3隻目がアディ・ギル号である。

今年の妨害は12月17日に始まった。ティーブン・アービン号が第二昭南丸にロープを投げつけたりレーザー光線を向けてきたりの妨害があった。つづいて、23日にはアディ・ギル号が緑の光線で妨害してきた。1月6日にはボブ・バーカー号が日新丸に異常接近し、その後アディ・ギル号が右舷の船首に衝突して大破し、曳航されていたが、ロープが切れたため、南氷洋に放置された。15日にはボブ・バーカー号が第二昭南丸に異常接近した。

彼らは妨害を起こすたびに撮影し、メディアに提供するため、世界のメディアが報道するが、豪州の受け止め方も若干変わってきたように思われる。日本政府も豪州、ニュージーランドに強く申し入れており、豪州の世論にも変化が見えてきた。

1月16日のシドニーモーニングヘラルドには「シー・シェパードを非難せずに黙認するのはおかしい。豪州は入港を禁止すべき」との記事が掲載された。また1月12日のオーストラリアンには、「ジェラード首相代行がシー・シェパードと日本の双方に冷静に、と呼びかけるのは変である」と書いている。私どもは引き続いて日本政府に実効ある対策を要請するものです。

◎乾杯のあいさつ

全国遠洋沖合いかり漁業協会

川口 恭一 会長

一昨日、年頭の記者会見でお騒がせしたが、私はイカ釣り漁業をなんとかしたい、と考えてのことだ。イカ釣りは油代がかさむが、まずこのコストを下げたい。そして冷凍イカのコンセプトを明らかにしたい。そのために努力したいと考えている。高圧の送電のロスがなくなる。夢ではなく、実現したいと思っている。

水産ジャーナリストの会、ご参加の皆様のますますのご健勝を祈り、乾杯！

水産ジャーナリストの会 山地 進顧問

水産ジャーナリストの会も去年で25年目を迎えた。1980年代、日米間の貿易摩擦や石油インフレなどいろいろなことがあり、農政ジャーナリストのような会をつくろうじゃないかと熊沢さんらと考えて、水産ジャーナリストの会をつくった。感慨深いものがある。

水産業界もいろいろなことが変わってきたが、メディア全体においてもデジタル化が急激に進み、新聞そのものが危機を迎えてる。県紙が毎年なくなっている。通信社は今後、どうなるのか。そうしたなかで、ジャーナリズムにどういう可能性があるのかを考えている。

今回受賞者の西川さんは、NHKの二元放送を見て、テレビを使う手法を考えられた。ぜひそのきっかけとなった斎藤さんからもお話をうかがいたい。

NHK 斎藤 元彦記者

私は流通に乗りづらいものを流通させるという試みに興味を持って、旬材を取材させていただいた。もう3年前になる。当時は名古屋にいた。農業においても「そもそも」の流通は課題だが、漁業で取り組んでおられると聞き、どんなふうにしているのかと取材に向かった。

西川さんが私たちの制作した番組を見て二元中継をひらめかれたというのは光栄だが、われわれは通常の仕事をただけだった。西川さんの仕入先の大分の漁業者を取材してその映像を流し、つづいて大阪の西川さんのところ、さらに消費の現場であるレストランへと画面を動かしただけだった。

私にとっても思い出に残る仕事なので、我々の仕事をヒントにしていただけたのであれば、これは光栄なことと思っている。

継続は力なり 小坂 智規

水産ジャーナリストの会監事
社団法人大日本水産会 常務理事

本会・社団法人大日本水産会の機関誌であり、会報でもある水産総合月刊誌『水産界』が平成22年1月号にて記念すべき第1500号となった。

本会は略称「大水」として業界内では広く親しまれていますが、設立は明治15年(1882年)に水産業の振興をはかり、水産・漁業に携わる方々の社会的、経済的地位の向上に資する事を目的にスタートして、去年2月12日には満128年を迎える事となります。『水産界』は明治15年4月に「大日本水産会報告」として創刊され、第123号から「大日本水産会報」と改題し、更に第398号から現在の名称の「水産界」となりました。大正13年7月第500号、昭和16年3月第700号と続きましたが、戦争の混乱期に一時休刊、昭和21年2月に復刊し昭和43年4月第1000号を印し、今日まで幾多の諸先輩の御努力と関係各位に支えられて金字塔とも言える第1500号の歴史を作る事が出来ました。水産・漁業関係の歴史を刻んだ資料として、社史編さん、テレビ番組制作、漁業史調査等々に携わる多くの皆様が来会し観覧されています。

単純に「1500」と言う数を一年12ヶ月で割り算しても125年の歳月が必要となり、その内容等を勘案すると明治以来の幅広い食料産業としての水産業の記録となっています。今後とも会員はじめ、業界の皆様の御意見、御指導を戴きながら、内容をより充実させ、継続発行に頑張って行きたいと考えております。又、本会は水産物の生産から加工、流通、販売にわたるオール水産を包含する団体として役職員一同業界の発展を目指し、更なる努力を重ねて参りたいと考えています。尚、記念号(第1500号)につきましては若干の余裕を持って印刷されておりますので無償(送料はご負担下さい。)にて差し上げる事が可能です。本会漁業部総務課にお問い合わせ下さい。